

(第3種郵便物認可)

東京

こちら特

反原発貫いた反骨の学者の妻

夫の遺志継ぎ 福島の子支援



旅立つ前に日本側のスタッフと打ち合わせする水戸喜世子さん(中)=大阪府高槻市の自宅で

一九七〇年代から原発の危険性を訴えながら、五十三歳の時に登山中に遭難して亡くなった核物理学者の水戸巖さん。その遺志を継ぐ妻の喜世子さん(中)が今月、福島の子どもたちを連れて韓国へ渡った。写真①、水戸喜世子さん提供。原発事故の被災者に対する差別的な風潮も心配になる。子どもたちに「強く生きてほしい」と願った旅では、夫とともに命を落とした息子たちの姿も重ね合わせ、滞在の一週間、温かなまなざしを向けた。

(橋原崇仁)



「今回は遺産相続の旅だと考えていました。私の思いや人のつながりを引き継いでもらう、という意味において、子どもたちと一緒にいると、みんなが自分の子どものように思えてしまいました」。帰国後の二十三日、喜世子さんはそう言っていて笑った。

東京大原子核研究所助教授や芝浦工業大教授などを務めた夫の巖さんは、京都大原子炉実験所の助教だった小出裕章さんが恩師と仰ぐなど、後進に多大な影響を与えた反骨の学者だ。

原発推進派が圧倒的だった七〇年代から、全国の原発を巡って環境調査や講演に明け暮れた。一男一女にも恵まれた巖さんの人生は、チェルノブイリ原発事故が起きた一九八六年の暮れに暗転する。当時二十四

「脱被ばく裁判」共同代表「みんな自分の子のように」

歳の双子の息子と趣味の登山中に行方不明になり、三人は遺体で見つかった。「夫は二度と出会えない」と言える優しい人で、息子はもっといい男でした。事故から三十年以上がたった今も、喜世子さんは三人の死を受け入れられず、まだ泣いていない。

二〇一一年三月、亡き夫が懸念した原発事故が福島府高槻市で暮らしてきた喜世子さんは、関西電力大飯原発や高浜原発の運転差し止めを求める訴訟や仮処分申請では原告や申立人になり、一時は運転禁止の成果もあった。

最も情熱を注いできたのは一四年八月から福島地裁で争う「子ども脱被ばく裁判」だ。原告に福島県内の小中学生を含んでいるのが特徴で、無用な被ばくを強いた行政の責任を追及し、安全な環境で教育を受けられるよう求めている。

喜世子さんは約二百人の原告を支える団体の共同代表を務める。高槻の自宅から福島地裁まで直線距離でも五百キロ以上あるのにもかかわらず、「守るべき存在」である子どもたちが原告にな

ると聞いて引き受けた。提訴から四年。気づいたのは原告の子どもたちの成長だった。「中学三年だった子が大学生。あと何年かで社会に出る年頃です」。一方で「被災地は復興ばかりが叫ばれ、放射線の危険性が軽んじられている。広島長崎の被爆二世が受けた差別の心配もあります」と語る。

「困難に立ち向かう心をはぐくみたい」と考えたのが海外への旅だった。家族三人を失った後に出た自身の放浪の旅も思い出した。「中国に行った時、貧しい山村でも笑って過す子を見て、生きる希望をもらいました」と振り返る。

福島の子どもたちにとって刺激が得られるよう、訪問先は知人がいる韓国を選んだ。東部の三陟市は原発建設に抵抗した歴史がある。「自然を愛し、故郷に誇りを持つ人たちが学ぶことは多いはず」と考えた。

一行は、原告二人に友人らを加えた中学生、大学生の計八人。喜世子さんは渡航や滞在などのために百万円あまりをカンパで集め、今月十六日に旅立った。

(c) . 中日新聞社 無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています。